

佐藤芳樹さんを悼む

奥 彬

佐藤芳樹さんが昨年秋 9 月、副会長に就かれて間もなく急性心不全で逝去された。研究討論会が熊本市で始まろうとする 1 週間前の訃報であり、寝耳に水の知らせにしばらく言葉も出なかった。夏のあいだに電話とメールでなにか話を交わしたときはたいへんお元気で、真下会長を補佐しながら本研究会活動を活発化して発展させようとする情熱と心意気が、その語り口に溢れていたのに。

土浦めぐみ教会でおこなわれたお別れの会に列席したが、佐藤さんが突然現れるのではないかという存在感がそのとき背後に感じられていたので、つぎのような弔電を喪主とご本人霊前に送らせていただいた。

佐藤裕子様：

ご主人の芳樹様のご急逝されたとの知らせを昨日受けとり、何が起こったのかしばらくわからず絶句しておりました。つい 1 週間前までメールでお話ししていましたので信じられません。ご家族の皆さまの驚きと混乱の大きさは私には推し測れませんが、きっと夢であってほしいと願っておられるのではないのでしょうか。

突発性の心筋梗塞とお聞きますが、そのようなご心配を抱えておられたことなど、ご本人から伺っていませんでしたので晴天の霹靂でした。私は佐藤さんから研究と学会活動の両面で大変お世話になってきました。変化と改革に挑戦する研究人生を歩んでこられたなかで、目に見えぬところに無理を重ねておられたのかもしれない。

ときおり出合えばできるだけ酒を酌み交わしてきました。大きな眼で人の心を見通すように、また直截な言葉を臆せず投げ込んでくる芳樹さんに、私はいつもどぎまぎしながら話を楽しんでいたものです。

佐藤芳樹さん：

大きな眼を細めて、「やーすまなかった、ちょっと冗談が過ぎたかな」と言いながら現れそうな、いや現われてほしいという気持ちがまだ私にはあります。そうであっても、今日は貴兄に別れを告げる日であります。合掌して心からご冥福をお祈り申し上げます。そしてあなたが蘇るのは、やり残した仕事を私達が進めたときでしょう。私もまだしばらくはあなたのお手伝いをしましょう。芳樹さん、それまでやすらかにお休みください。

F S R J に革新の風を起こすはずだった男、それは佐藤芳樹さんだったと私は惜しむ。この研究会の元会長の一人としてたいした仕事をしなかった私に言う資格はないかもしれないが、正直そう思っているのは事実なのである。

革新とは言い過ぎと思われるかもしれないが、それぐらいの意気込みを持たなければ本研究会が実働社会と産業という現業界を相手にして、あるときは連携して、変化を起こすことはできない。そこに必要なのは「企画と行動に基づく現実的な改革を進める情熱」であり、佐藤さんの企画行動力のお世話になった本会員は多いはずである。

佐藤芳樹さんには革新・改革という荒々しい言葉よりも、企画と戦略を地道に練り上げて行動する人、という言葉が当てはまるように思う。出会うときはいつも“**What's new?**”と問いかけながら、彼が何を感じて何を考えているかを語り、それに対する意見と反応を求め、その視線はつねに先の時代に向けられていた。現会長の真下先生はそこに期待しておられた。

佐藤さんがまだ副会長職を引き受けておられない頃に私が送った私信を、許可を得ないままここに借用する。彼が私達のFSRJ活動について描いていた将来像と感想がこの中に示されていると思っているからである。

佐藤さん： 久しぶりの邂逅でしたね。いろいろお話しした中で二人に共通する関心事は、FSRJの将来とそれを支える次世代の力についてでした。

本会の将来像を社会の中にどう位置づけるか、それを考えながら前世代の者は布石を敷いてきましたが、これからそれを踏んでゆく人々の意識が気になると話していた貴兄に同感です。本会の社会的認知度を高めて研究活動を活性化する基盤としては、産業、行政、そして市民社会への奉仕活動を本会員が連携して行うこともその一つですが、それ以上に、研究者として信頼を得ることが大切であるという点で私たちの考えは一致しましたね。

研究者としての信頼とは、研究の先見性、先導性、質の高さ、そして教育的姿勢にあるわけですから、この視点に立って、FSRJを引っ張る現在の中堅陣にもっと迫力ある研究活動を行ってほしい、と貴兄は望んでおられます。「実験を行ってみたらなにか結果が出た」のような研究発表は少なくしなければならない、研究目的を明確に持ち、研究手法・実験手段を構成する化学的根拠を持ち、得られた結果を化学的また論理的に正しく説明し、成果を今後の展開に生かす、という当然で基本的な研究の質と姿勢がまずは問われるのだと貴兄は言いました。それに加えてFSRJの分野では、研究の成果を社会へどのように投げかけるかが期待される、なんとも敷居の高い要求ですね。

一般的に言えば本研究会関連の研究には、課題が化学技術的または社会科学的であれ、手法が既知または新規であれ、課題に対してその手法で「どこまでどのように効果的に適用できるか」という内容の研究が多いようです。それをシミュレートする土俵は実社会ですから、十分に自己評価してから外部評価に曝さなければなりません。ただ事例を多くするだけでは研究と呼べません。「たぶん役に立つ」程度の期待よりも「驚きの発見」につながり、「そうなると思っていた」より「そうだったの、使ってみようか」につながる研究に価値があるのでしょう。

「普遍的アイデアで普遍的手法を用いて当然の結果が得られる」のは、プレハブ住宅の建築と同じかもしれません。プレハブ工法であっても耐震長寿命型の住宅団地計画のように、プラスチック製品の耐久性と長期使用を可能にする商品を設計し、低エネルギーのリサイクル技術を開発して、化学原料循環を社会ネットワークに編成するように、社会の中に飛び込む企画がもっと本会にあってほしいと思います。

本研究会活動には研究発表討論会、国際会議、講演会などがあります。しかし貴兄が最近よく言われますように、本会の会員は本会以外の仕事や他の学会活動に忙しすぎて、FSRJ活動のための学習が不足してはいはしまい、というご心配には同感です。ですから貴兄が言われるように「顔を持った学習会」を立ち上げることに賛成します。そのとき私も東京まで出掛けて学習に参加しましょう。

それではこのあたりで失礼します、ご機嫌よろしう。 奥 彬 拝